

【 復活讃詞 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりしとき、かみのせいの
死 生 命 爾 死 降 時 き、神のせい
の

ひかりにてぢごくをころせり。しせしものをちかより
光 地 獄 殺 り。死 者 地 下

ふくかつせしめしとき、てんぐんみなよびていへり、
復 活 時 き、天 軍 皆 呼 び て 日

いのちをたもうしゅハリストスわが神みよ、こうえいはなんぢに
生 命 賜 主 吾 神 光 榮 は 爾 ち に

き 歸 す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 】



こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよに、アミン。
光 榮 父 子 聖 神 歸 今 何 時 世 世

しととひとしくどうぎなるものちゅうじつにしてしんちなる
使 徒 等 同 座 者 忠 實 に して 神 智

ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえられたるふえ、ハリストスの
役 者 聖 神 撰 笛

あいにみちたるうつわ、わがくにのこうしようしゃ、
愛 満 器 我 國 光 照 者

あしとしゅきょうせいニコライよ、なんぢのぼくぐんのため、
亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲

およびぜんせかいのため、いのちをたもうせいさんやにいのり
及 全 世 界 爲 め に、生 命 賜 聖 三 者 祈



たまえ。

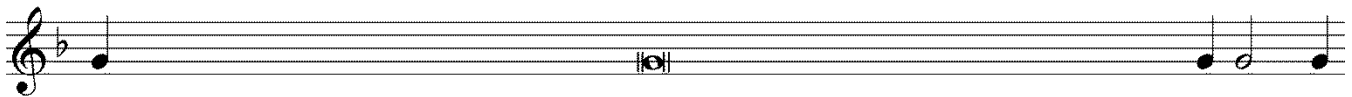
司祭) (黙誦： ^{せい かみ せいじゃ うち いこ} 聖なる神、^{せいさん こえ もつ かしょう} 聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう} セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} ヘルヴィムより讚榮せられ、^{さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう} 悉くの天軍より伏拜せられ、^{ばんぶつ む ゆう} 萬物を無より有と
^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} なし、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 人を爾の像と肖とに依りて造り、^{ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ} 爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す} 願う者に智慧と明悟とを與え、^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す} 罪を行おう者を棄てずして、^{そのすくい ため つうかい} 其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} を立て、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 此の時に於ても、^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい} 爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} る祭壇の光榮の前に立ちて、^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの} 爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} なしし主宰よ、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ} 爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 以て我等に臨み、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ} 我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} を聖にし、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい} 聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ} 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋 ^{けだしわ かみ なんぢ せい} 我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい} 爾は聖なり、^{けだしわ かみ なんぢ せい} 我等光榮を ^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 爾父と子と聖神に献ず、^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ} 今も何時も世世
 に、

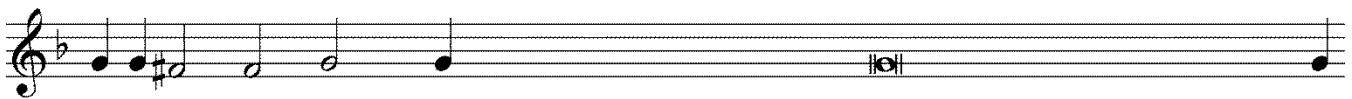


アミン。

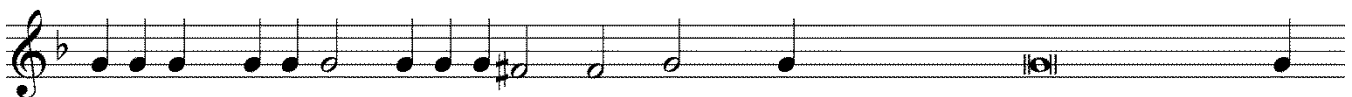
【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、われらを
聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者 我 等



あわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいの
憐 め 聖 神 聖 勇 毅 聖 常 生



ものよ、われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
者 我 等 憐 め 聖 神 聖 勇 毅



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
聖常生者我等を憐



こうえいはちとことせいしんにきす いまもいつもよよにアミン。
光榮父子聖神歸今も何時も世世にアミン。



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
聖常生者我等を憐



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生者



われらをあわれめよ。
我等を憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第2調 】

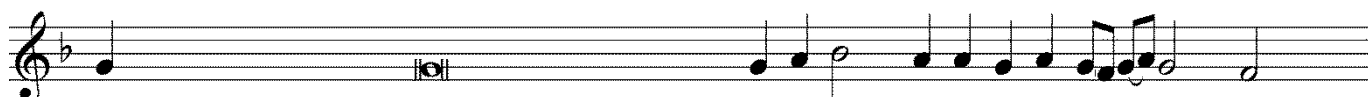
司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、



しゅわがちから、わがうたなり、かれはわがすくいとなれり。
主我力我歌彼我救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、



しゅわがちから、わがうたなり、かれはわがすくいとなれり。
主我力我歌彼我救

誦經) ^{しゅ わ ちから わ うた} 主は、我が力、我が歌なり、



【 使徒經 (アポストロス) 141 端 コリント前書 9 章 2~12 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ ぜんしょ よみ} 聖使徒パウエルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい なんぢら しゅ おい われ しとしよく いん われ ぎ もの わ こた ところこれ} 兄弟よ、爾等は主に於て我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

^{われらあにくら の けん われらあにしまい つま たづさ た しとおよ しゅ} なり。我等豈食い飲むに權なきか。我等豈姉妹なる妻を攜うること、他の使徒及び主の

^{けいてい およ ごと しか けん そもそもひとりわれ こうさく けん} 兄弟、及びキファの如く然る權なきか。抑獨我とヴァルナヴァとは工作せざる權な

^{だれ ぐんし な おのれ きゅうやう もつ つと だれ ぶどう う そのみ くら} きか。誰か軍士と爲りて、己の給養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹えて、其果を食

^{だれ むれ ぼく むれ ちち くら われただひと じょう したが これ い りっ} わざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食わざらん。我唯人の情に循いて之を言うか。律

^{ぼう またか い あら けだし りっぼう する いわ こくもつ ふ おと うし ぐち} 法も亦斯く言うに非ずや。蓋モイセイの律法に録して云く、穀物を踐み落す牛には口を

^{と なか かみ うし ため おもんばか そもそもこれ い こと われら ため こ} 閉づる勿れと。神は牛の爲に慮るか。抑之を言うは、特に我等の爲にするか。是れ

^{われら ため する けだしたがえ もの のぞみ たがえ こくもつ ふ おと もの その} 我等の爲に録されたり、蓋耕す者は、望ありて耕すべし、穀物を踐み落す者は、其

^{きぼう ところ う のぞみ これ な も われなんぢら うち しん ぞく もの ま} 希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を播きたら

^{なんぢら み ぞく もの か あにだいじ も たにんこ けん なんぢら うち え} ば爾等の身に屬する物を獲るは、豈大事ならんや。若し他人此の權を爾等の中に獲ば、

^{いわん われら しか われら こ けん もち すなわちおよそ こと しの} 況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃凡の事を忍ぶ、ハリストス

^{ふくいん いささか さまたげ お ため} の福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。

(比較用 口語訳)

あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者がある

うか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言っておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈り取るのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 主日第2調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{ねが} 願わくは主は ^{しゅ} 憂 ^{うれい} の日に於て ^ひ 爾 ^{おい} に聴き、^{なんぢ} イアコフの神の名は ^{かみ} 爾 ^な を ^{なんぢ} 扨 ^{ふせ} ぎ ^{まも} り、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{おう} 王を ^{すく} 救え、^{またわれら} 又我等が ^{なんぢ} 爾 ^よ に呼ばん時、^{われら} 我等に ^き 聴き ^{たま} 給え、



ア ril l i ya、ア ril l i ya、ア ril l i ya。

司祭) (黙誦: ^{ひと} 人を ^{あい} 愛する主 ^{しゅ} 宰よ、^わ 我が ^{こころ} 心に ^{かみ} 神を知る ^し 智慧の ^{ちえ} 浄 ^{いさぎよ} き ^{ひかり} 光を ^{かがや} 輝かし、^わ 我が ^{しねん} 思念

^め の目を ^{ひら} 啓きて、^{なんぢ} 爾 ^{ふくいん} が福音の ^{おしえ} 教を ^{さと} 悟らしめ ^{たま} 給え、^わ 我が ^{うち} 衷に ^{なんぢ} 爾 ^{ふく} の福たる ^{いましめ} 誠を

^{おそ} 畏るる ^{おそれ} 畏 ^い をも ^{われら} 入れて、^{ことごと} 我等が ^{にくたい} 悉 ^{よく} くの肉體の ^ふ 慾を ^{およ} 踏み、^{なんぢ} 凡 ^{よるこ} そ ^{ところ} 爾 ^{ところ} の喜ぶ ^{ところ} 所

^{おも} を ^か 思い ^{おこな} 且つ ^{ぞくしん} 行 ^{せいかつ} いて、^す 屬 ^{いた} 神の ^{たま} 生活を ^{けだし} 過ぐる ^{かみ} を致 ^{かみ} させ ^{かみ} 給え、^{かみ} 蓋 ^{かみ} ハリス ^{かみ} トス ^{かみ} 神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を 施す 爾の神とに光 榮を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 77 端 18 章 23~35 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖 福音經を聴くべし、 衆人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖 福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾に 歸 し、 光 榮 爾に 歸 す。

司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 主は左の 譬を設けて曰えり、天國は、其 諸僕と會計せしを欲せし君王に似たり。會

計を始めし時、一 千萬金の 債ある者を彼に曳き來れるあり。其 償うこと能わざる

に困りて、主は彼の身と、其 妻子と、其 悉くの所有とを鬻ぎて、償 わんことを命ぜ

り。其 僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我 盡く爾に償 わん。

其 僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に 債を免せり。其 僕出でて、一人の同僚の、己に

銀一 百の 債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾が負う所を我に償

え。其 同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我 尽く爾に償 わ

ん。然れども、彼肯わず、乃 往きて、其 債を償うに至るまで、之を獄に下せり。

佗の同僚之を見て、甚 憂い、來りて有りし所を 悉く主に告げたり。其時主は彼を

召して曰く、惡しき僕よ、爾 我に求めしに困りて、我 其 債を 悉く爾に免せり、我

が爾を 憐みし如く、爾も亦 爾の同僚を 憐むべきに非ずや。主 乃 怒りて、其

悉くの 債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し 爾等 各 其心より己

の兄弟に其 罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く 爾等に行わん。

(比較用 口語訳)

天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんちにきす。
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮 爾 歸 。